

次女の娘たちの空

木立嶺
Kodachi Ryo

しめ子
Illustration

KODANSHA
BOX
POWERS
BOX



第一話 「長男の受難」

7

第二話 「AとBの狭間で」

29

第三話 「ロストファーザー・樋田小宵」

53

第四話 「アプリオリ襲撃」

77

第五話 「次女達の超魔空戦線」

101

第六話 「運命と自由と銀の弾丸」

125

第七話 「跡継ぎの陰謀」

149

第八話 「家族の階梯」

173

第一話

「長男の受難」



——隣が女子高だから受験したんじゃない、進学校だったからだ。それに、所詮ダメモトだった。

入学式を終えた桐岬透夜は、天を仰いで嘆息した。

「何とか滑り込んだけど……これはまずい」

前後左右では、星丘高校の新入生達が、正門にぞろぞろと向かっている。各クラブの勧誘部隊がずらりと網を張っている、そのただ中へ。

「まずい……惨劇の記憶が甦ってきた……っ！」

思わず胸を押さえる。中学入学時、先輩達の勧誘を断れずに、すべてのクラブに同時入学してしまい、一日でパンク——それは、決して忘れられないトラウマ。しかも今回は、校長直々に『ドンケツの合格者』の二つ名まで授かっている、部活をする余裕がそもそももない。

「危険だが……やはり、例の抜け道を使うか……」

桐岬は新入生の波からそとと離れると、ひとり校舎の裏手に回った。

「……ここだな」

学校を囲うフェンスの前に立つ。

これを越えて、フェンス沿いに右に進めばいい。左は森林公園だし、正面は壁なのでNG。

……で、気がついた。その壁にプレートが貼ってあることに。

『学校法人中部国際女子高校・部外者及び星高生の立ち入り厳禁！』

「そうだった……隣は女子高だったんだ……」

抜け道をググールマップで調べた時は、そこまで頭が回らなかつた。

しかし、もう後戻りはできない。

「やっぱり……自分の目で確かめておくんだ……春休みで体なまってるし……あと、フェンス高っ」

だが何とかクライミングには成功、さて乗り越えようと右足を上げた瞬間——その相手と目が合った。

「う」

「わ」

壁——正確には擁壁——の上に立つ女子高フェンス

は、星高のそれより三十センチほど低い。その上に一人の女子生徒がまたがり、こつちを見つめていた。

「……………」

「……………」

ちなみに、二人の間は五十センチくらいしか離れていない。

女子生徒は、国女の制服である、ライトグレーのブレザーに桜色のチェック柄のスカート、定番の紺色ソックスに黒の靴——何となく体に馴染んでいない着こなしと、両手に抱えた新品の学生鞆——。

明らかに新入生だ。

しかも、口にはサンドイッチまでくわえていて、定番過ぎる。

前髪は校則ギリギリまで伸ばしてある様子で、両の瞳はぱつちりと見開かれ、その内心をスクロール表示していた。

——何で登校初日から、こんな恥づかしい目に遭わなくちゃならないのよ。学校の出入りに校門を使わないのが、そんなに罪なわけ？

——それに、小腹が空いたらおやつをつまむのって、人として自然な行為じゃない。私は断食をしにこの学校に入ったんじゃないの。

——それなのに、よりによって隣の高校の男子に見つかるなんて。どうしようどうしよう、ええと、そう
だ！

次の瞬間、女子生徒は左手でサンドイッチをつかむと、桐岬の顔面に叩きつけた。そして二秒後、悲鳴を上げた。

「あー、私のサンドイッチ！ あああ——っ！」

「……アホな」

桐岬は思わず呟いた。視界がパンのやわらかい感触に塞がれ、香ばしい匂いが鼻をくすぐる。

「せ、せめて手前のパンと具だけでも助け——ああっ」

女子生徒は桐岬の顔面から、サンドイッチの無事な部分を剝がした。当然ながら、具のハムやレタス、それに桐岬側のパンは、支えを失って三メートル下に落ちた。

「ああああ——っ、ハムううう——っ、何でえええ

——!?!

女子生徒はフェンスにまたがったまま、マスタートドとマヨネーズの塗られたパン一切れを手に、茫然として
いる。

桐岬が見守るうち、彼女の瞳がみるみる潤んでいった。

そして——残ったパンを、いきなり桐岬の口に押し込んだ。

「もワッ?!」

「ゴミはゴミ箱か長男につ! じゃあねっ」

女子生徒は身を翻し、さっさとフェンスを下りていった。擁壁は飛び降りでごなし、きれいに着地を決めて、そのまま小径を憤然と去っていく。

桐岬がやっと『ゴミ』を飲み込んだ時には、彼女の姿は森林公園の中に消えていた。

「つまり、長男はゴミ箱ってことか? ——ウエゲホッ」

胸を叩いて、食道に引っ掛かったパン切れを胃に送り込む。

長男——それは確かに桐岬のステータスだが、見ず知らずの人間にゴミ箱扱いされる筋合いはない。

「でも、通報されずに済んだし——というわけで、俺も帰るか」

そろそろとフェンスを下りる。ダークブルーのジャケットに黒いスラックスの制服は、特に愛着もないが、破れたらそれはそれで困る。

両足が地面に着くと、思わず大きな溜息が漏れた。足下には、サンドイッチの儻々な残骸が、枯れ草の上に転がっている。

「まさか、これも食えと……?」

桐岬はぶつぶつ呟きながら、ティッシュで残骸を拾い上げた。あとでどっかに捨てよう。

彼女の反対方向に進んで、住宅街に出る。桐岬は物陰から、道路にそっと首を突き出した。

「なるほどな……」

すぐそこに国女の正門があり、クラブの勧誘部隊らしき女子高生達が、何人もたむろしていた。

翌日、桐岬は三組に組分けされた。教室に見知った顔はなかったたので、自己紹介では思い切って、あだ名ネタを披露ひろうすることにする。

「名字が『キリサキ』なんで、小学校の頃は『切り裂きジャック』と言われてたんですけど、中学に入ったらジャックつながりで『豆の木ジャック』に変わって、育てのブロとして、鉢植はちうゑえの水やりばかりやらされていました」

クラスの雰囲気は優しく、このネタはそこそこの笑いを取った。そして担任は、桐岬を校庭の花壇かだんの水やり係に任命した。

HR後、教室を出た桐岬は呻うめいた。

「誤算だった……役職がつくオチとは、血涙級けつるいきゅうの誤算だ……っ！」

そう、桐岬は他人の依頼を断れない性格だった。それができるのは、別の予定とかが入っている場合に限

*

られる。

「これはもう、急いで予備校を決めて、スケジュールを埋めてしまおう。でない、三年前と同じパンクエンドは避けられん！」

ちなみに、正門は前日と同じ状況だった。桐岬は迷わず例のルートを選択した。

「昨日は文句言わなかったが……鞆がジャマっ」

やっとこフェンスを上り切る。桐岬は慎重しんちょうに右足を反対側にかけて、そして例の女子生徒と目が合った。

「——っ！」

もう少しで転落するところだった。

目の前にあるのは、前回とまったく同じシチュエーション。唯一の違いは、女子生徒がサンドイッチではなくメロンパンをくわえている点だ。どういう思考回路を経て、そんな可愛い結論に至ったのだろうか。

——ええい落ち着け、昨日通報されなかったんだから、今回も大丈夫だ！

桐岬は勇気を出して、挨拶した。

「ええと、昨日はどうも」

女子生徒は、返事の代わりに桐岬を睨みつけた。その視線が伝えるメッセージは、明らかに『サンドイッチの恨み、相当根に持つてるんだからね』。

駄目だ——桐岬の額に、汗の粒が浮かんだ。——これは詰んだかも。

と、女子生徒のぴんと張った細い眉が、ふと眉間に寄せられた。そして、桐岬の顔をさつきとは違う視線で、じーっと見つめ始めた。

「……………」

仕方なく、桐岬も相手を見つめ返した。

「……………」

「……………」

沈黙のまま、意味不明のにらめっこが続く。

やがて、桐岬の精神が限界に達した瞬間、女子生徒はメロンパンを口から離すと、やおら質問を放った。

「あなた、もしかして次男？」

「はい？」

「次男かって訊いてるの。どうなの？」

——何それ、何その質問？

桐岬は反射的に否定しかけ——昨日の彼女の言葉を思い出した。そう、ゴミはゴミ箱か長男に。

桐岬は唾と真実を飲み込むと、短く答えた。

「ああ」

女子生徒の目が、わずかに見開かれた。

「そういう事は早く言いなさい。なよなよした雰囲気
で長男だと思ったじゃない」

「ああ……悪い」

強張った笑みを浮かべる。何かすごく引つかかるものがあるが、口には出さない方がいいだろう。この女は長男という存在が大嫌いらしいし、ここは地上三メートルの高さだ。

突き落とされたくない。

女子生徒は、桐岬につと顔を近寄せてきた。

「私は真夜中美朝。見てのとりの次女よ」

「次……女……？」

「そう、次女。あなたの名前は？」

「き……桐岬透夜だけど」

「透夜、ね。クラブにはもう入った？」

「いや、ただだけど」

美朝は自分の鞆から一通の封筒ふうとうを取り出すと、桐岬の眼前に突きつけた。

「家に帰ってから、これ読んで。私達のクラブの内容が書いてあるから」

「あの」

「早く取って、こっちもバランスが危ないんだから」

桐岬はあわてて封筒を受け取った。それは、色気も何もない、いかにも業務用の白封筒だった。

「これって、もしかして勧誘——？」

「決まってるでしょ」

「決まってるって、女子高の部活に、よその学校の男子は参加できない——」

「次男は別よ。いい？ 封筒の中身は誰にも見せないで。そして読み終わったら、すぐにシユレッターにかけるか焼却処分しなさい。それじゃ」

「あ、ちよつと」

声をかける間もあらばこそ、美朝はささつとフェンスを下りて、公園方向に駆け去った。

桐岬はあつけにとられて、その後ろ姿を見送った。

「女子高の部活から勧誘されるとは——さすがに予想外だった……」

次の瞬間、はつと我に返った。どんなクラブにせよ、とにかく入部はお断りしなくてはならない。桐岬はひとまず地上に下りると、封筒の封を破った。家で読めとは言われたが、周囲に人の目はないし、ここで読んでも害はないだろう。

中には、四つ折りの紙が一枚だけ入っていた。桐岬はそれを広げて、紙面に視線を落とした。

そして顔を上げると、茫然と呟いた。

「次男だろうが何だろうが、コレに入部は絶対無理だろう……」

説明も何もない、紙にはクラブの名称だけが大きく書かれていた。

「次女じじよつ娘こクラブ」と。

六限目終了のチャイムが鳴り響き、教室はどつと解放感に包まれた。桐岬は教科書とノートを片付けて、そそくさと教室を後にする。

校門にはまだ勧誘部隊が陣取っているので、例のノートを使うしかない。そしてフェンスの前に来てみたら、案の定――。

「待ち構えていたか……」

女子高フェンスの頂に、美朝がちよこんと乗っかっていた。ぱっちりした瞳が、桐岬をじーっと見下ろしている。

「早く上らなかつたら、スカート覗きの疑いを掛ける。タイムリミット、私がイラつくまで」

桐岬はただちにフェンスに取りつき、ひいこらよじ登った。そして、何とか間に合った。

美朝は言った。

「入部を歓迎するわ、桐岬透夜」

いきなり！――桐岬は内心クラツときた。だが、ここで流されたらおしまいだ。とにかく、正当な理屈で押しまくって押しまくって――。

「歓迎の証として、まずは私のムチアメを食べさせてあげるね」

その言葉と同時に、美朝の手がさつと動いて、桐岬の鞆を持ち主から奪い取る。

「あ、え、あ？」

桐岬が我に返った時には、美朝はその手を、女子高の敷地に伸ばしていた。

「あー、落ちそう落ちそう、透夜の鞆が女子高の敷地に落ちそうー」

「い、いきなり実力行使とは、卑怯にもほどがある！」

「うーん、鞆が重い、これ以上支えてらんないー。そうだ中身を捨てよおー」

「わー、よせーっ」

喚く桐岬を、美朝はにやにや見つめている。

「どう？ それともこんな茶番はやめて、ダイレクトに通報されたい？」

「ぐ……のあ……」

桐岬が喉の奥から意味不明の音声を発すると、美朝の笑顔が満月になった。

「これで決まりね。鞆は地面に着いたら返してあげる」
言うが早いか、ぱっと身を翻した。

「え、ええーっ？」

桐岬は思わず叫んだ。美朝は左手に鞆を二つ持ちつつ、右手と右足だけを使って、垂直のフェンス&擁壁をだらだらーつと滑り下りたのだ。そして両校の間にスタツと着地、三メートルを下りるのに二秒とかかかっていない。

「ほら、ぱーつとしてないで、透夜も早く下りてきなさい」

「あー、はい……」

毒気を抜かれた桐岬は、おとなしく指示に従った。地上で改めて美朝と向き合った時、桐岬は相手の背丈を初めて知った。ちょうど自分の目の高さに、彼女の頭のとっぺんが来る感じだ。

美朝は勝利者の優越を漂ただよわせつつ、鞆を持ち主にぼんと返した。

「ムチアメおいしかったでしょ」

「さっきのは明らかにムチしかなかった！」

「それじゃ、いったん公園に出てから、改めてうちの学校に入るから」

「って、人の話を」

「あ、一つ言うことがあった」

美朝の表情が、ふと和なごらいた。

「サンドイッチの落ちたの、片付けてくれてありがとう。ちよつとジーンときちゃった」

「あ……いや、そんな、当然のことをしたただと思
うし……」

「そんなにお腹空いてたんだって」

「食べてないっ！」

「ハイハイ、それじゃ、案内するから私にぴったり付いてきなさい。他の生徒に見つかったら面倒だから」
美朝は踵かかとを返すと、意気揚々と森林公園に向かつて歩き始めた。

——負けたんじゃない、俺は、負けたんじゃないんだ。

桐岬は物悲しい言い訳を自分にしつつ、その後にく。

公園に入ったところで、美朝はいきなり切り出した。「透夜はロアール・アムンゼンって知ってる？ 世界で初めて南極点に立った探検家で、しかも次男なんだけど」

「はい？」

「若い頃、ロアールは兄のレオンと一緒に、ノルウェーのとある氷原を横断しようとしたの。だけど、レオンは長男だから根性なしで、旅が大変だからって自分だけ引き返そうとしたら、氷河の割れ目に落ちこちちやっつたの。当然ロアールが助けたんだけど、おかげで目的地まであと五百メートルのところ、旅は中止になっちゃったんだって」

「えー、あー」

「このエピソードが示しているように、長男は基本ダメな存在だから、私達次女や次男がリードしなきゃいけないの。でも少子化のせいで、今やどっちも絶滅危惧種でしょ？ だったら絶滅危惧種同士、力を合わせなきゃ。あ、こっちよ」

美朝は散策道から、木々の生い茂る斜面に分け入っ

た。そのまま二十メートルほど下ると、そこは女子高の裏手だった。

敷地を囲むフェンスの背後に、四階建ての部室棟。外壁は真っ白で、いかにも清楚なお嬢様の学び舎然とした佇まいを見せている。

美朝は桐岬の耳にそっと囁いた。

「これが、うちの学校への一番安全な侵入ルート」

「その台詞は撞着語法か婉曲表現か反語か皮肉か、さもなきゃ真っ赤な嘘だろおい！」

「へえ、難しい言葉を知ってるのね」

「塾行ってたし！ ていうかあれを見ろって！」

桐岬は喚きながら、正面を指さした。そこに突っ立っているのは、誰がどう見ても防犯カメラだった。

「ところがどっこい、このカメラは壊れてるの。職員室に入った時、モニターのスイッチが切れているのを確認済みよ。だから、堂々と通っても平気なの。ほら」

美朝はフェンスに手をかけ、しなやかな身のこなしでよじ登り始めた。そして、肩越しにちらと桐岬を見つめる。

「……ええいつ！」

桐岬はやくそくそ気味に後に続いた。美朝のぴんと張った眉は、どうしても猫のヒゲを連想させる。

*

「問題なのは、カメラじゃなくて人の目なのよね」

「人の目にスイッチは付いてないしな」

「余計なことは言わなくていいから、頭を下げて」

美朝は部室棟の壁にびったり張り付き、窓から中をうかがった。廊下に人の姿はない。

「この学校では、カップル狩りが定期的に実施されていて、検挙された男子は、不法侵入者として屋上に吊るされるそうよ」

「……もちろん、冗談なんだよな？」

「冗談も役に立つわ。敵の半分はうかつに侵入できないから」

「敵？」

「長男どもに決まってるでしょ。いいから静かにして」

二人はコンクリート製の非常階段を、すばやく二階へ。

「ドアの陰に隠れて」

美朝はノブに手をかけ、鉄製のドアをそっと開いた。そして、廊下をさっと見はるかすと手前の部屋のドアを開けて、桐岬を中に押し込む。

「——つとと」

部屋に数歩入ったところで、桐岬はたたらを踏んだ。美朝がドアを閉めて、外の喧騒けんそうを閉め出す。

「ここが次女っ娘クラブの本部よ」

その声が自慢げだ。

「透夜以外のメンバーは、全員私と同じ中学の出身。半年前から密かにクラブの構想を練っていたの。そして入試に合格したら、すぐに校長にアプローチして、クラブ開設の許可を取りつけたわけ。もちろん、次女っ娘クラブなんて名前は出せないから、表向きは家庭部になってるけど」

「それはいいけど、もし俺が教師とかに見つかったらどうするんだ」

桐岬は遠慮えんりょがちに室内を見回した。女子高の部室と

いうのに、男子の妄想を膨らませるようなものは見当たらぬ。ごくありきたりの部屋だ。

「大丈夫よ、いざという時に備えて、部屋には伊賀の忍者屋敷並みの仕掛けを施してあるし」

美朝は部屋を横切り、壁際のカウチの前に立った。

「例えばこれなんか、中は空洞になっていて、クツシヨンを上げるとほら」

「っ！」

桐岬は中を覗き込み——反射的にのけぞった。

カウチの中には、一人の女子生徒が横たわっていた。柔らかな髪は、豊かな波を描いて広がりが、その眉は、母性本能を象徴するかのように緩やかなラインを描いている。頬はほんのりと紅に染まり、唇はまさに可憐なもの。男なら誰でも見とれずにはいられないだろう。

そんな子が、つぶらな瞳に涙を一杯に溜め、両手には消火器を握り締めて、今にも桐岬に向けてレバーを引こうとしている。

「やああああん、来ないでえええーっ！」

「うわ、まっ待ってください話せば分かる！」

桐岬が両手で自分の顔をかばう横から、美朝が鋭く女子生徒を制した。

「待って、彼は次男よ。名前は桐岬透夜、私がスカウトしてきたの」

「うくっ……次男……？」

「そう、この男は、待望のファミリーAの長男役なの」

「はあっ!？」

思わず叫び声を上げた桐岬の口に、美朝は掌を叩きつけた。

「静かにっ、男子の声を女子高中に響かせる気？」

桐岬が目を白黒させる一方、カウチの女子生徒はごくりと唾を飲み込み、やがて、ひううーと安堵の吐息をついた。

「よかったあ、長男役の人だったんですね。本物の長男だったらどうしようかと思ってました。——うんしよ」

消火器をそっと下ろすと、少女はスカートの埃を払いながら、カウチの外に出た。

「脅かしてごめんなさい。でも、私達は用心しているんです。なるべく二人一組で行動することとか、部屋に一人でいる時は絶対に姿を現さないこととか、発見されたら全力で相手の記憶を消すとか——あ、ごめんなさい、自己紹介がまだでしたね」

そして、両手を前にそろえて、桐岬にぺこりとお辞儀をした。

「常西夕香といいます。透夜さんが私達の仲間になってくれて、とても嬉しいです」

美朝が桐岬の口から手を離し、同時にじろりーと睨んでくる。桐岬は質問を飲み込むと、ぎこちなく頭を下げた。

「あ、いえ、こちらこそ」

丁寧な挨拶をくれる女の子には、悪い印象の持ちようがない。護身具が消火器というのも、これはこれで微笑ましい。だけど、もし俺が長男だとバレていたら、彼女から一体どんな目に遭わされていたか。いや、それよりも重要なのは——。

「美朝さんの言葉どおり、次女っ娘クラブは、私達、

次女として生まれた者達が設立したクラブです。そして私は、透夜さんの隣のファミリーのお母さんです」
桐岬の頭が凍った。

「と？」

「質問があれば、何でも訊いてください。え、何ですか？」

「と、と、隣の——」

それ以上、言葉が続かない。そこへ美朝が割り込んだ。

「駄目よ、夕香が質問に答えるのはナシ」

「え、でも」

「長男には自力で問題を解決させるのが、ファミリーAの教育方針なんだから。ファミリーBは干渉しないって決めたでしょ」

「いつけない、忘れていました。てへっ」

常西は軽く舌を出した。

「というわけでごめんなさいね、透夜さん。隣のお母さんが、よその教育方針に口を出しちゃいけませんから」

「いえ、あの、一体」

「次男が長男役を務めるのは、確かに大変だし本意なことだと思えます。でも、決して本物の長男ではなくて、云わばコンセプトとしての長男ですから」

「はあ……」

——希少価値だの絶滅危惧種だの言うから、てっきり次男次女を、環境省のレッドデータブックにでも登録する運動かと思ったら、何かお母さんの長男だのと、全然違う方向に走り始めてるし、一体何がどうなつて。

混乱する桐岬をよそに、常西は美朝に向き直つた。

「あ、でも、A B共通項目だけは教えてあげた方がいいと思いますけど」

「ま、それはそうね」

美朝はくるりと桐岬を振り返ると、その表情が急に真剣になった。

「よく聞きなさい、私達次女っ娘クラブには、アプリアオリという敵がいるの」

「アプ——リオリ？」

「フランス語のア・プリオリ、日本語に訳すと『先験的』、すなわち、理屈抜きで最初からそう決まってるという意味のコードネームよ。私達は、敵をこの名称で呼んでいるの。アプリアオリ、この言葉に気をつけるのよ。アプリアオリ、分かった？ ア・プ・リ・オリ、間違えないでよ」

「アプリアオリは、私達の活動に反対しています」

常西が口を挟んだ。

「私達がこの学校に入学したのだから、アプリアオリの妨害を受けない、安全な活動拠点を確保するためです。でも、アプリアオリはとても頭が良いので、用心を怠つてはいけません。いつ外部からアプリアオリが侵入してきて、私達の活動を破壊するかもしれないんです。だから透夜さんも、次女っ娘クラブの一員になったからには、アプリアオリにはくれぐれも気をつけてください」

「あ、ああ」

——くそっ、その気はないのに、頭が無理矢理『アプリアオリ』という言葉に聞き間違えようとする。駄目だこの脳、ああーものすごく敵の姿を見たい。

桐岬の心情にはお構いなく、美朝はパンパンと手を叩いた。

「さて、最低限必要な注意事項は伝えまし、メンバーもそろったからには、いよいよ正式に活動開始よ」

常西が、胸の前で両手をぐっと握り締める。

「いよいよその時がやって来たのですね。母親役として、長男を一生懸命育てなくては」

桐岬は飛び上がった。

「え？ ということは、常西さんが俺を——？」

「違う違う、夕香は『隣のお母さん』でしょ。何を勘違いしてんの」

右手を振ると、美朝はその親指で自分を指した。

「透夜の母親役は、この私」

「はい？」

「ファミリアの母親は私が務めると言ってるのっ。

透夜はこれから、私のことを『お母さん』と呼ぶのよ、いい？」

「ちよっと待て！」

愕然とする桐岬に、常西がにっこりと微笑みかけた。

「ご心配なく、私が母親役を務めるファミリアBには、すでに長男役が用意されていますから。次女っ娘クラブは、透夜さんを含めて五人いるのです」

「それはつまり……残りのメンバーがこの部屋に隠れていると——？」

桐岬はうろたえて部屋を見回したが、それらしき場所は見当たらない。

と、美朝が制服のポケットから携帯を取り出した。

マナーモードで着信があつたらしい。

音量は最大設定になっていて、やけに冷静な女子の声が、桐岬の耳にまではつきり聞こえた。

『ロストファザーより、マザーメイトへ定時報告』

「こちらマザーメイト、報告どうぞ」

『本日の化現^{けげんめいそう}瞑想を終了した。これよりアプリオリ監視作戦を開始する』

「了解、監視作戦を実行せよ、以上」

美朝は携帯を切った。

「つまり、そういうこと。あともうひとり屋上にいるわ」

「それは分かったけど、何で会話が軍隊調なんだ。てか、シリアスなクラブなのかこれは」

「シリアスに決まってるでしょ。大体、軍とか騎士団とか、歴史的に次男三男の職場なんだし」

「そうなのか！　って、そうじゃなくて、何で女子のコードネームが『ファザー』なんだよ。あと化現瞑想ってなに！」

「んー知らない」

「おい！」

「というわけで、これよりファミリアとBは、それぞれの長男役を教育するべく、互いに切磋琢磨して――」

美朝は不意に顔をしかめて、ポケットから再び携帯を取り出した。

「こちらマザーメイト。ロストファザー、どうしたの？」

地味に違和感満載のコードネームを持つ少女は、冷静な声で凶報を告げた。

『緊急事態発生、ケース・シヴィア、シヴィア。ハン

ターT六体、ハンターS六体より成る混成査察部隊が、部室棟各階に進入』

常西がはっと口に手を当てた。

「ケース・シヴィア——カプトル狩り？　でも、まだ新学年が始まったばかりなのに、抜き打ちなんて——まさかっ」

『査察は、文化部部室棟から聞き慣れぬ男の叫び声が聞こえたという通報を受けてのもの。そのため、部室の立ち入り検査を行うと思われる』

美朝はさっと桐岬の方を振り返った。桐岬はぎくりと背筋を伸ばす。

「透夜がいちいち叫んだりするから、大変なことになっちゃったじゃない！」

「そんな、俺のせいだったって……」

「ハンターTとハンターS、つまり、教師と生徒会の連中が合わせて十二名も動員されているのよ。相手が本気になったら、カウチなんて役に立たない。いいから静かにしてて！　マザーメイトよりロストファザーへ、今の状況を知らせて」

「部隊主力は各階渡り廊下を封鎖、非常階段——」
言葉が途切れた。一拍置いて、再び響いてきた声は、わずかに早口になっていた。

「別働隊を確認。ハンターT四体、ハンターS八体が、各階廊下及び非常階段を封鎖中、通常の脱出ルートは使用不可能。緊急脱出手順の使用を勧告する」

「何てすばやいの！ 勧告を承認、ただちに実行する。以上、マザーメイト！」

美朝は携帯を切るや、桐岬の腕をつかんで窓辺に駆け寄り、窓を開け放った。同時に、縄梯子なわはしが上からぱらりと落ちてきた。

「これを伝って屋上に上りなさい。命令よ」

「アホなっ」

桐岬は思わず口走った。次の瞬間、背後から常西のほっそりした手が伸びてきて、桐岬の口をガムテで塞ふさいだ。

「声は絶対に出さないでください、お願いします」

「ン——」

物理的に声を奪われ、目を白黒させる桐岬の腕を、

美朝が取ると、その手に縄梯子を押し付けた。

「さあ早く、私も行くんだから！」

——ええい、くそ！

桐岬はやけ気味に窓から身を乗り出すと、縄梯子を夢中で上り始めた。

中庭には女子生徒が数名たむろしていたが、全員カップル狩り騒動に気を奪われていて、頭上の出来事には気づいていない。

「人間は所詮二次元思考なのよ。ほら、急いでっ」

下から美朝がせっついてきた。

三階と四階を無難に通過し——幸い部屋は無人だった——手すりを乗り越え、やっと屋上に辿り着く。そこには、明るい髪を両脇りょうわきで結んだ、幼い顔立ちの女子生徒が待ち構えていた。

生徒は、炭酸飲料のペットボトルを桐岬に振りかざした。

「あなたは誰ですか？ 返答次第では、この屋上から叩き落とすことも厭いといませぬ！」

甲高い声かんだかが響く。桐岬はもちろん答えられない。だ

が、美朝が二人の間に割って入った。

「心配しないで、彼は真夜中透夜、本物の次男にして、私の長男よ」

「なーんだ、そうだったのっ」

——俺の名字が！

桐岬が愕然とするのをよそに、女子生徒はぱっと顔を輝かせた。

「私は塚野真屋つかのまひろといますっ！ 高い所が大好きですっ！ よろしくですっ！」

ぺこりぺこりと二回お辞儀をすると、不思議そうに桐岬の顔を覗き込んでくる。

「返事がない……お口はどこですか？」

探さずとも分かれ——っ！ ——桐岬の心の叫びをよそに、美朝が再び割り込む。

「挨拶は後回し、今は逃げるのが先」

「そうでしたっ、今から準備しますっ」

そう言うのと、塚野はペットボトルをシヤカシヤカし始めた。ボトルの首には細いロープが巻き付けられ、給水塔きゅうすいたうの梯子と結びついている。

シヤカシヤカが済むと、塚野はボトルをぐるぐるんと風車のように回転させ始めた。

「風向05、風力2、気圧17」

まさか——。桐岬の脳裏を、激しい予感がかすめた。

「気温16、湿度60、星高給水塔までの距離、四十メートル」

——ああ、やっぱり！

「そおれっ、飛んでけー！」

元気な掛け声とともに、塚野はボトルを宙に放り投げた。次の瞬間、内圧に耐えかねたキャップが弾け飛び、ボトルは炭酸飲料を勢いよく噴出しながら、ロケットのように加速した。

ロープを後ろに引きつつ、ボトルロケットは優雅なラインを、空色のキャンバスに描く。午後の太陽が、航跡こうせきをプリズムに一瞬の虹を添えた。

数秒後、ボトルは星高の屋上給水塔に命中、ロープが梯子の棧いしに絡まった。

塚野はロープをくいと引っ張り、張力を確かめた。

「うん、開通しました」

「私達が一番乗りしちゃって、悪いわね」

美朝が言うと、塚野はニコッと笑った。

「いいですよ。『下り』は好きじゃないですから」

その言葉通り、両学校の屋上には二メートルの落差がある。だが、桐岬の心の目は、青ざめた自分の顔を見ていた。

——『下り』だろうが何だろうが、これを伝うのは自殺行為だろ！

桐岬の視線の意味を、塚野は正しく解いたらしい。

「あははっ、そんな芋虫いもむしみたいな真似まねはしなくていいですよっ」

そう言いながら、給水塔の陰から小さな車輪を引っ張り出した。それは、自転車しやてんの補助輪を改造したものらしく、車軸しゃじくが左右に伸びていて、両手でつかめるようになっている。

「この乗り物でびゅーんと行ってもらいます」

「ん——っ！」

「ほら、ぐずぐずしないの」

暴れる桐岬を、美朝が羽交はがい締めじにした。そして桐

岬ごと給水塔によじ登り、塚野から受け取った『乗り物』とかいう誇大表現たごを、ロープの上に載のせる。

「ン——ッ！」

「往生際が悪いの！」

美朝は嫌がる桐岬を、強引にハンドルにつかまらせた。そして、その上に自分の両手を添えて、両足を桐岬の胴体に絡める。

そこに、コードネーム少女、ロストファーザーからの連絡が入った。

『査察部隊が部屋に到達、室内の搜索を開始。ホームメイトは現在、マニュアルに則りのっと対処中。警告、縄梯子を発見される』

美朝は舌打ちした。

「しまった、引き揚げを忘れてた。——悪いけど塚野、ハンターどもが屋上あふに来るわ。あとはお願ねがいね」

「任せてください」

「ん——ッ——ン——ッ！」

「それじゃ、二人は出発してください。それ行けどーんっ」

掛け声とともに、塚野は二人の背中をぐんと押した。反動で桐岬の両足が梯子を離れ、両手に全体重がかかった。ちやちなロープウェイは、二人の重みでみるみる加速し、風の唸りが耳元で荒れ狂う。

「ツンンン——！」

屋上を囲う手すりがぐんぐん迫ってくる。なのに、余裕が全然足りない！

「足を上げて！」

美朝の叫びに、桐岬は反射的に両足を上げた。次の瞬間、シュンという音とともに、二人は手すりを越えた。そして——。

桐岬は全身で風を切っていた。地面がはるか下を流れていく。耳元で制服の襟がバタバタと音を立てる。

車輪とロープのこすれ合う鈍い音、美朝の腕の圧力と、背中に押し付けられた彼女の胸の柔らかさ、心臓の鼓動、それが世界のすべてだった。

前髪がぱさつと煽られ、空が視界に入った。伏せたお椀の形をした綿雲が、午後の陽光を浴びて、エッジを眩く輝かせる。

星高の校舎が、圧倒的な量感で迫ってきた。二人は再び両足を上げて手すりを飛び越え、コンクリートを打たれた屋上に。桐岬はブレーキをかけそこなって、その場にびたんとすつ転ぶ。背中に美朝の体重がぎゅつとかかって、息ができなくなった。

「よくやったわ、それでこそファミリアの長男っ」

美朝は弾んだ声で、桐岬の口を覆っていたガムテをむしり取った。桐岬はゲホゲホと激しく咳き込む。

「——痛え」

呻きながら上体を起こすと、ペットボトルがポンと屋上に当たって弾み、次いでカラカラと音を立てて転がってきて、二人の傍らで止まった。

胴体に、ロープのもう一方の端が結えてある。塚野が二本目を打ち込んだのだ。

「さすが、マヒルミサイルは正確無比ね。——ほら透夜、ぼさつとしてないで、ロープを回収よ」

その時、美朝の携帯に着信が入った。

「査察部隊が屋上に突入、ボトルマスターを発見、周辺の搜索を開始」

美朝はさっと桐岬を振り返る。

「ここにいたら目撃される。隠れて！」

「くそつ、早い！」

桐岬はロープやボトルその他の装備とともに、給水塔の裏に駆け込んだ。一瞬遅れて、美朝が滑り込む。

桐岬は荒い息をつきながら囁いた。

「もしも、塚野が自白したらどうする？」

「心配ないわ。一人で遊んでたつて言えばいいんだから。嘘を証明できはしない」

「だいたいがつ」

「しっ」

二人はびったり体を寄せ合い、息を潜めた。常西と塚野は、学校側の追及を切り抜かれるだろうか。

息の詰まるような五分が経ってから、再びロストフアーザーから連絡が入った。

「査察部隊は部室と屋上の搜索を終了、成果なし。ケース・シヴィアを解除する」

美朝はふうと安堵の溜息を漏らした。

「初めてにしては、みんな中々よくやったわ。悪いけ

ど、引き続き監視をお願いね」

「了解、安全のため、以後の連絡を中止する。以上、ロストフアーザー」

携帯を切った美朝は、上気した顔で拳を突き上げる。

「次女っ娘クラブは人材豊富！」

桐岬はぐったりと足を投げ出した。

「俺はこれから、どうなるんだろうなあ……」

「透夜には一つだけヒントをあげるわ。これは私達だけのクラブ活動じゃない、日本中の次男次女の未来を切り拓く、偉大なる挑戦だってこと！」

「そういう話もいけどさ、森ばかり見ていると、木の葉を見落とすもんだ」

「何よ」

「俺の心配はそっちじゃなくて、女子高の制服姿の美朝が、どうやってうちの学校を出るのかってことなんだが」

「それは自分で考えなさい。うちの家庭教育方針よ」

「……アホな」

「アホな」は以後禁止。それと、私のことはお母さ

んと呼びなさい。いい？ 期待してるわよ」

美朝はさらりと締めくくると、再び空を見上げた。その瞳には、明日への希望と期待が満ち溢あふれている。

そしてこれが、桐岬の受難の始まりだった。